

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷四十四第

行發日一月一年二十和昭

## 新年特別號

地方營業税の課税標準……………法學博士 神戸正雄

固定資本論の一節……………文學博士 高田保馬

土地所有の集中と分散……………經濟學博士 八木芳之助

大都市時代の出現と<sup>その可の</sup>考察……………濟經學士 中川與之助

經營協議會制度の成立……………經濟學士 大塚一朗

北支日系通貨に就て……………經濟學士 松岡孝兒

アメリカ經濟の發達と通貨論争……………經濟學士 堀江保藏

統計・統計調査・統計教育……………經濟學博士 蜷川虎三

貿易と生産・消費との關係……………經濟學博士 谷口吉彦

新國民主義と國民共同體……………經濟學博士 石川興二

金融の動きと銀行勘定の増減……………經濟學博士 小島昌太郎

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

## 大都市時代の出現とその可能原因の考察

中川與之助

## 一、大都市時代の出現

統計學者の間にありては人口十萬以上の都市を以て大都市 (Grossstadt) とすといふことに意見が一致してゐる。さて斯様な大都市が今日世界に幾何程存してゐるだらうか、試みに最近の報告に徴するに、實に歐洲に二百四十四、<sup>2)</sup>歐洲外に二百九十四を數へ、<sup>3)</sup>東洋の一孤島たる我日本の内地 (即ち臺灣朝) にすら三十四を數へるのである。然も世界に於けるこれらの大都市の中、人口百萬以上を有する所謂百萬人級大都市 (Millionstadt) 或は世界都市 (Weltstadt) とよばれるものが、その數三十四五にも及ぶ。<sup>4)</sup>今、これらの大都市の發達を觀るに、殆どそれは産業革命以後大體に就ていへば一八〇〇年代以後に屬する。地球上に今日まで人口十萬以上の都市が現はれなかつたのではないか、<sup>5)</sup>今日の如く多數の大都市が殆ど時を同しうして、即ち僅か百三四十年の間に、地球の到る處に建設せられ且つ尙現に建設せられつゝあるが如きは、人類歴史に空前の出來事といはねばならぬ。學者現代を名けて大都市時代 (Die Zeitalter der Grossstädte) とす。<sup>5)</sup>思ふに今日地上にかくも多數の大都市の建設せられたといふことは、地理學上からみても、正しく現代を前代と劃する重要な出來事であり、一大壯觀たるには違ひないが、それにも況して現代大都市のもつ文化的機能と影響に至りては偉大なるものがある。大都市は現代文化の創

1) A. Weber, Die Grossstadt S. 5.

2) 外國の分は Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich. 1935.

3) 同年鑑1933 に據る。 4) 日本都市年鑑(昭和十一年度用)に據る。

5) M. Leinet, Die Sozialgeschichte der Grossstadt V. S. 25-26.

造者であり支配者である。農村はいふも更なり、大小無数の中小都市も亦大都市を主動者とする一大組織の中に編入されてしまつてゐる。大都市は實に現代生活の主動者であり指揮者である。これらの意味を併せ含めて、現代の大都市時代といふ様に特徴付けやうとする事は、又十分の理由を有するものと考へられる。而してこの所謂大都市時代は上にも述べたるが如く、産業革命以來にあらはれしものなるが、この事は又自ら各國で行はれし産業革命の早かりしと後れたるとによりて、その國の大都市時代の現出に年代的の前後を生ぜしめた理由となるのである。即ち産業革命の最も早く行はれし英國に最も早く近代的大都市が發達し、獨逸米國殊に日本に於てはそれより遙かに後れてその發達をみるに至つたのである。<sup>(註二)</sup>

(註一) 九三五年の獨逸統計年鑑に據れば、歐洲に於ける人口十萬以上の所謂大都市の數は、獨逸五三(一九三三年)・白耳義四(一九三〇年)・ブルガリヤ二(一九三四年)・丁抹二(一三三〇年)・ダンチツヒ一(一九二九年)・エストランド一(一九三三)・芬蘭一(一九三〇年)・佛蘭西一七(一九三一年)・希臘三(一九二八年)・大ブリテン五五(一九三一年)・北愛蘭一(一九二六年)・愛蘭自由國一(一九二六年)・伊太利二二(一九三一年)・ユーゴスラウイア三(一九三一年)・レットランド一(一九三五年)・和蘭五(一九三〇年)・諾威一(一九三〇年)・澳太利三(一九三四年)・波蘭一(一九三一年)・葡萄牙二(一九三〇年)・ルーマニア五(一九三〇年)・露西亞二四(一九二六年)・瑞典三(一〇三〇年)・瑞西四(一九三〇年)・西班牙一〇(一九三〇年)・チェコスロヴァキア五(一九三〇年)・トルコ一(一九二七年)・匈牙利三(一九三〇年)合計二四四であり、歐洲外に於ける人口十萬以上の大都市數は一九三三年の同年鑑に據ればイ亞細亞では支那三二(調査年は不明)・イタクト一(同上)・日本二八(一九三〇年)・臺灣一(一九三〇年)・朝鮮三(一九三〇年)・關東一(一九三〇年)・波斯二(一九二〇年)・亞細亞ロシャ七(一九二六年)・シヤム一(一九二九年)・亞細亞土斯古一(一九二七年)・英領印度三八(一九三一年)・英領マレー三(一九三一年)・英領植民地<sup>(香 港)</sup>二(一九三一年)・佛領印度支那四(一九三一年)・蘭領印度七(一九三〇年)・シリヤ及びリバノン三(一九二九年)・フィリッピン一(一九二九年)・合計一三四、亞弗利加では埃及三(一九二七年)・アルゲリヤ三(一九三一年)・モロコ三(一九三一年)・南亞ユニオン三(一九三一年)・チネネジヤ一(一九三一年)合計一三、亞米利加では北中米の中、北米合衆國九三(一九三〇年)・カナダ七(一九三〇年)・キューバ一(一九二八年)・グア

テマラー(一九二八年)・ハイチー(一九二〇年)・メキシコ四(一九三〇年)・ポルトリコー(一九三〇年)合計一〇八、南米ではアルゼンチン八(一九三〇年)・ポリビヤー(一九三〇年)・ブラジル一〇(一九三二年)・チリー二(一九三〇年)・コロンビア四(一九二八年)・エクアドル一(一九三〇年)・パラグアイ一(一九二九年)・ペルー一(一九二八年)・ウルガイ一(一九三一年)・ヴェネズエラ一(一九二六年)合計三〇、濠洲では濠洲聯邦六(一九三三年)・新西蘭三(一九三一年)合計九、歐洲外の分總計二九四と報じてゐる、但し右統計年鑑には一九三〇年に於ける日本地の大都市數を二八と報じてゐるが日本都市年鑑に據れば三二である。右掲げたる各國の大都市數は人口調査の年度をまち／＼にしてゐるので精確なる現在數をこれから算出出来ぬが、歐洲の分を約二五〇、歐洲外の分を約三〇〇と概算して今日實に五百五十許りの大都市が地球上に存在してゐるのである。

(註二)日本の大都市は昭和十年現在に據れば(日本都市年鑑による)人口百萬以上のものは東京・大阪・名古屋・京都の四、五十萬以上のものは神戸・横濱の二、三十萬以上は廣島の一、二十萬以上のものは福岡・長崎・吳・仙臺・八幡・函館・静岡の七、十萬以上は札幌・熊本・横須賀・鹿児島・和歌山・佐世保・岡山・金澤・川崎・小樽・堺・豊橋・新潟・濱松・下關・岐阜・門司・小倉・大牟田・高知の二十を數へる。

(註三)國際統計會議では人口二千以上の住所を都市となし、二千以上十萬までを中都市(Mittelstadt)、十萬以上を大都市(Grossstadt)とよぶ。マイヤー(Mayer)は人口百萬以上のものを世界都市(Weltstadt)と名けた。<sup>5)</sup>

(註四)一九三五年獨逸統計年鑑に掲げられたる世界に於ける百萬人以上の大都市(Milinstadt)は、歐洲ではベルリン・ハンブルク・パリ・ロンドン・バーミンガム・グラスゴー・ローマ・ウイーン・ワルシャウ・モスコ・レーニンград・バルセロナ・ブタペストの十三、歐洲外では上海・天津・北京・東京・大阪・カルカッタ・ボンベイ・カイロ・紐育・シカゴ・フィラデルフィア・デトロイト・ロスアンゼルス・ブエノスアイレス・リオデジャネロ・サンボロ・シドニーの十七である。然し(註二)にみる如く日本では東京・大阪の外に名古屋・京都が百萬級に上りこの外神戸は今日九十一萬餘を有しこれ亦近く百萬級に上るであらう。

(註五)ヘロドト(Herodot)に據れば古代バビロンの廣袤は約五百平方方(今日の伯林の約八倍)に上り、パイブルは大都市ニニヴ(Niniv)はそれを一周するのに三日間を要したと記し、その中には百萬の人間が住んでゐたといはれる。紀元前三世紀二世紀に巨大都市(Riesenstädte)として勃興せるものにプトレミー國(PTolémaierreich)・セロイキア國(Seloukideneich)の首都がある。而してゼロイキアには六十萬の人口があつたといはれる。かのカルタゴにはポエニ戦争前に約七十萬の人口があり、古代ローマ市は二百萬の人口を有したといはれる。紀元七世紀から十二世紀にかけて歐洲の唯一の大都市はコンスタンチノープルで

あつた。十字軍の時代頃から次第に歐洲に大都市が現はれ始め、伊太利ではメーランド・ヴェニス・ナポリが十萬或はそれ以上を有するに至り、佛國ではパリーの人口は十四世紀の始め以來急増したが、その後半に疾病の爲めに多數の人口を喪つた。十六世紀に東洋への新航路が発見せらるゝや茲に大都市の勃興をみるに至り、ロンドンの如きはエリザベス時代に人口十萬から二十五萬に躍進し、獨逸ではウイーン・ハンブルグが、和蘭ではアントワープ・アムステルダムが、ピレネー半島ではリスボン・マドリッドが何れも大都市級に進み、一八六〇年頃には今の獨逸領域にベルリン・ハンブルク・ミュンヘン・プレスロー・ドレスデン・チルンの六大都市を數ふに至り一九〇〇年には實に大都市數が四十六に上つたのである。<sup>7)</sup>

(註五ノ二)モストは大都市ニイーヴの人口は六十萬以上には上らざりしなるべく、アテネの人口はその盛時に於ても十五萬ローマの人口は約七十萬であつた。獨逸では中世都市の最も榮えた十五世紀に於て、都市人口はケルンが約三萬、ストラスブルグ・リニューベック・ハンブルグ・ニューレンベルヒは約二萬から二萬五千、アウグスブルグが一萬八千、フランクフルト・アムアインは九千、ライプチヒが四千、ドレスデンが三千乃至五千であつたといふ。<sup>8)</sup>

(註六)ライノルトに據れば(一)英國にありては大都市の勃興は一八〇〇年頃から始まる。即ち一八〇一年から四一年までに、都市人口はパーミンガムは七萬三千から十八萬一千に、シェツフィールドは四萬六千から十一萬一千に、マンチェスターは三萬五千から三十五萬三千に、リーズは五萬三千から十五萬二千に、ブラッドフォードは三萬から十萬五千に増加してゐる。一八〇一年から三一年に至る間に人口はリバプールでは一八三%、グラスゴーでは一六一%の躍進を示し、ロンドンは一八〇〇年から二一年までに九十萬から百三十七萬九千に上つた。(二)獨逸では一八五〇年頃から都市人口の膨張が始つたが所謂獨逸の大都市時代は同國の資本主義の榮え出した一八七〇年以後とみるべきである。一八七一年から一九〇〇年までの間に住民十萬以上の都市數は二四二・一%、二萬から十萬までの都市數は一〇三%、五千から二萬までは四七・八%、二千から五千までの住所數では二七・〇%、二千以下のそれは僅かに一・二%の増加である。都市殊に大都市數の著しき増加率をみるべきである。大都市の數は一八八〇年が十五、一八九〇年が二十六、一九〇〇年が三十三であつた。(三)佛國では極端なる中央集權の結果大都市が多く發達しなかつたが、それにしてもパリーの人口を始め、マルセーユ・トゥーロン・ニツツア・リヨン・ボルドー・ナント・リニエール等の大都市的發達は十九世紀のことである。パリーの人口は一八〇〇年が六十萬、一八七〇年が百八十萬、一八八一年二百二十四萬一九〇一年に二百七十一萬に上つた。(四)アメリカでは同國の産業革命が成就された一八六〇年以後から大都市時代が始まる。大都市數は一八八二年には僅かに二に過ぎざりしが、一八八〇年には二十、一八九〇年には二十八、一九〇〇年には三十八となつ

7) A. Weber, Die Grossstadt. S. 5-7.

8) O. Most, a. a. O. S. 9.

た。大都市の急速なる増加と膨張とはアメリカの一特色をなしてゐるが、その代表的なものとしてシカゴの如きはその人口、一八三二年は七百、一八四〇年は四千五百、一八五〇年に三萬、一八八〇年には五十萬、一八九〇年には百十萬に上り、一九一〇年には二百二十一萬、今日は實に三百四十萬の大人口を有する *Misstadt* (其の如く速かに發達する都市の義) といはるゝも亦宜なりといはねばならぬ。ライネルトは日本に就て詳細に述べてゐないが、日本に於ける大都市の發達も亦、日本の産業革命及び資本主義の發達と歩を一にしてゐる。日本内地の人口十萬以上の大都市は日本資本主義の勃興期である明治二十一年には六なりしが、日清戦争を終へて勃興期に入るや、明治三十一年にはその數八、三十六年末には九となり、日露戦争後の四十一年末には十、大正二年末には十一、世界戦争の影響をうけて愈々隆昌期に入つた大正九年には十六となつた。爾來、經濟界には起伏あるが人口の膨張と都市の發達とは停止せず、大都市數は大正十四年に二十一、昭和五年に三十二而して現に三十四を數へる。<sup>10)</sup>

## 二、大都市時代現出の諸原因

以上の如く産業革命以後に至りて大都市時代が現出したが、この現出を可能ならしめたる諸原因は何であらうか、そこには社會上・政治上・經濟上科學上等の諸種の原因が存するのである。

### (甲) 經濟上社會上の原因

(a) 分業の發達 機械の發明は一つの仕事を數十乃至數百の過程に分ち、その各々の過程が一の職業となりて人々に多くの働き場所を提供する。かくて分業は雷に多くの職業を創造するのみならず、又その仕事が簡單化せらるゝが故にあらゆる人を吸収する。分業は農商業よりも工業に於て最もよく發達しうるが故に、工業は又最も多くの労働者を働かしうる。工場工業の榮ゆる近代的工業都市 (*Gewerbestadt*) に多數の労働者やサラリーマンが集りて大都市を建設してゆく一の理由はこゝにある。(b) 農村利用の擴大、都市はゾムバルトのいふ如く、<sup>11)</sup> その生

9) M. Leinert, a. a. O. S. 25-50.

10) 日本都市年鑑、昭和八年用、に據る。

11) W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus* Bd. I. S. 128.

活が農業的勞働の生産物に依存する人類の聚落である。而して都市殊に大都市の職業は原則として非農業的である。されば彼等はその生活資料や加工原料を農業に仰がねばならぬ。これ古來都市の發達は一面に於て常に農業に制約されて來た理由である。然るに近世に至り國民經濟・世界經濟の時代に入るや、都市が利用しうる農業領域は昔日の如き封建的或は封鎖的制約から解放されて國內的・國際的に擴大されるに至つた。即ち今日の都市殊に大都市は國內はいふまでもなく世界の隅々に至るまでの農産物を利用しうるのである。この意味に於て近代大都市の如きは地方都市・領域都市に非ずして國內都市・世界都市といへるであらう。近代都市の發展にとりて有利なる條件となつたものは、右の如く都市の利用しうる農業領域の擴大の外に、農業生産力の發展である。農業の生産力は近世に入るに至りて機械の利用・農耕技術の改良・農地の科學的管理農政の進歩等によりて著して増大したのであるが、言ふ迄もなく今日の營利經濟の下に於て農村の過剰生産物は都市との交換によりてのみその經濟的意義を見出す。されば發展したる農業生産力の結果は必然的に都市に提供せらるゝのである。即ち農業生産力の發展が近代都市發展の基礎をなしてゐる。(c)農村過剰人口の存在 大都市に於ける巨大なる數に達する人口は何處から來たかといふに勿論當該各都市に於ける土着市民の人口の自然増加の結果のみでなく他からの移入に由るのである。その他からの移入民は農村からの直接の移入民と、他の大中小都市からの移入民とに分ちうるが、<sup>(註七)</sup>而も亦後者の大部分は農村出身であることは統計上推定されてゐる所である。<sup>(註八)</sup>然らば農民は何故に農村を捨て、都市に移入するか又何故に都市殊に大都市にそれが集中するか、農民が農村を捨て、都市に移入する理由に就ては文化的理由例へば農村の封建的な煩はしき傳統拘束から解放されて自由な且つ華かな都會文化を享受

せうといふが如き欲求も無視出来ぬが、それにも況して大なるは經濟的社會的理由である。即ち近代經濟社會に入るに及んで、農村に於ける地主の土地兼併・貨幣經濟の浸入農村副業の都市工業化・自給自足經濟の崩壊・農業利潤が工業利潤に及ばざるによる資本の都市への流出小作料や公課負擔の重壓等の諸原因が農村殊に中小農民の生活を非常に苦しきものたらしめ、農村で支持しえざる所謂過剰人口を發生せしめたるによる。かくて資本主義の國々に於ては例外なく農村人口の都市の移動が行はれた。更に轉じて移動するこの人口は何故に大都市に集中するかといふに、それは大都市にありては商工業が發達して就職の可能性が大なることを主要原因となすが、更に又大都市では中小都市よりも文化的設備が一層完備してゐるといふことゝ併せて近代的社會政策が發達してゐることによることを忘れてはならぬであらう。大都市に於ける社會政策の發達は人口の大なる吸引力であり、人口の大なる吸引は更に社會政策の改善擴張を促がしつゝある。

(註七)一九〇〇に於ける獨逸三十三大都市の人口の五六・七%は移は移入民であり又それらの大都市に生まれし者の中二七・七%は他へ移出してゐる。

(註八)カッセルは獨逸工業人口の源泉としての農村人口を研究して、一八九五年から一九〇七年までに四百三十七萬人、これを年平均にして三十六萬五千人が、更に日に直すと一日當り千人宛が農村を捨て、都市の商工業に向つたことゝなると推定してゐる。<sup>12)</sup>一九三一年獨逸年鑑に據れば、八七一年には獨逸人口の約三分の二が人口二千以下の地方部落に住んでゐたが、一九二五年にはそれが約三分の一となつた。而してこの約五十年間に増加した人口は主として大都市に集つたと報告してゐる。大都市民になる迄に一旦は中小都市民であつたとしても、もとは大部分農村出であつたことはそれらの報告でも明かである。又都市民の都市から都市への移動に就てはライネルトは一九〇〇年獨逸三十三大都市の人口の五六・七%は移入民であり、又大都市に出生したものの二七・七%は他へ移出したといつてゐる。<sup>13)</sup>

12) G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie, S. 502.

13) Leinert, a. a. O. S. 54.

(d) 資本の存在及び造成 機械が発達し且つ農産物の世界市場が大都市のために解放せられたとしても、都市にして資本を有せざりせば、これら機械や農産物を利用することが出来なかつたであらう。然るに近代大都市の多くのものは封建時代から蓄積されてあつた資本を承繼し、近代社會に入るに至つてそれを商業上・工業上に利用し出した、即ちそれら資本の一部は固定資本として進歩したる近代的な機械や建物に、一部は流動資本として原料や勞働の購入に充てられて近代的な活動を開始するに至つた。都市に於ける資本の造成が目覺ましく、古き資本は又新なる資本を生みて更にその膨張を続け、都市としての社會的・經濟的機能を益々擴充していつた。封建時代からの中小都市にはかくの如くして近代的大都市に發達して行つたるものが少からずあるのみならず、又舊都市に蓄積されたる新資本を以て新なる都市が建設せられそれが又大都市へと發展したるものも亦少しとせぬ。要するに近代的大都市が建設せられた根本動力が資本にあつたことは何人も否めない所であらう。更に資本をしてかくの如き近代的活動をなさしむるに當りて、金融爲替制度市場の組織等の發展が與つて大なる力ありしは言ふを俟たぬ。

(乙) 法律上政治上の原因 (a) 職業・居住・信仰及び契約の自由 封建時代に於ける如く國民に職業や居住或は信仰の自由が奪はれてゐたならば、農民が商工民に變ずることも、田舎から都會に移住することも、又異教徒が雜居することも出来ず、到底大都市の建設は出来なかつたであらう。然るに宗教革命佛蘭西革命等の洗禮をうけた近代社會はそれらの封建的拘束―例之、ギルト制度和居住法及び封建的宗教法―を撤廢してそれらの自由を許した。茲に於てか多數の農村無産者が都市に移住することも都市的職業に就く可能性も與へられたのであるが、更に

その可能性を増大したるものに契約自由の原則の確立をいはねばならぬ。近代の自由主義社會は公序良俗に反せざる限り原則として人々の間に於ける賣買・取引の自由を許した。この自由が認めらるゝに及んで勞働契約も商品の賣買も自由となり、都市の經濟活動は益々擴充せられ、都市に集り來る多くの人々に職業と生活とを與ふるに至つた。(B)政治上の原因 大都市が建設されし政治上の原因としては近代國家の政治的能力と都市の政治能力の發達を述べねばならぬ。前者に言及する所以は蓋し近代國家にありては都市は國家より獨立するものに非ずして常に國家政治の支配統制の下にあるからである。従つて國家にして都市に對する政策を誤つたならば、都市は到底その發達をみるをえないのである。然るに近代社會に入るや都市は一國經濟活動の心臓なりとせられて、これが發達助成に國家はあらゆる方面から——例之港灣修築・道路・鐵道敷設・電信・電話の設置・模範工場の建設・整備制度の完整・學校の設置及び教育・宗教政策の改善等——盡したのである。獨り國家が都市の發達を助長したるに止らず都市に自治體として自由と責任を與へてその活動を促進せしめた。近代都市の發達にはこれらの國家的政治能力が至大なる關係を有することは極めて明瞭であらうと思ふ。

更に轉じて都市それ自體の政治能力をみる。都市の政治能力は今世紀に入りて著しく進歩した。それは一つには上に述べし國家的な政治的體制の力に倚るは勿論であるが、又他には集團生活に於ける經驗の結果は自ら市民に共同の利害關係に就ての自覺と、従つて又協同的精神の發達を促すに至つたによる。人は十九世紀を競争(Competition)の時代といひ二十世紀を協同(Co-operation)といふ<sup>14)</sup>のも亦理由なしとせぬ。かくの如く協同的精神の發達したるに加へて、近代大都市の發達は次第に市政に關する理論的・技術的研究を促がした。昔日は單なる素

14) Pollock and Morgan, Modern cities p. 11-14.

人が市政の實務に與つたのであるが、今日は多くの専門家を要求し又専門家が輩出しつゝある。この事が又都市の經營に科學的基礎を與へ都市の存立と發展とに大なる寄與をなしつゝある。都市は單に警察保安とが災害防止等の消極的方面のみならず、進んで市場病院の設置、交通系統や機關の改善、上下水道を始め保健・衛生設備の完備、社會救濟制度の擴充等の積極的活動をなしつゝある。殊に近時の都市計畫 (City Planning, Städtebau) はこれら都市に關する知識の綜合として都市經營の根本理論を教へるものなるが、その研究は益々専門的に科學的になりつゝある。都市計畫は今日の所主として、住宅問題交通問題等を中心として論ぜられてゐるが、將來は都市の經濟社會組織と運營に關する計畫にまで進まんとする情勢を示しゐる。そは兎に角、近代大都市が比較的狭き地域に多くの市民を生活せしめ、かれらの福利を増進しつゝあるは全く都市計畫の賜に外ならぬのである。

(丙) 近世に於ける科學上の諸發見 (a) 近代大都市の出現に與つて特に貢獻の大なりし理化學上の發見は電氣とコンクリートとである。電氣は都市の交通と照明に、コンクリートは都市建築に各々一大革命を齎らした。周知の如く電氣は今日電信・電話及び電車として都市の交通に又電燈としては一般的な照明に使はれてゐる。<sup>(註九)</sup> 電信殊に電話や電車或は電燈が近代大都市にとりて如何に必須不可缺のものであるかは、大都市の生活を一度反省すれば直ちに明瞭であり、敢て乗合馬車や馬車鐵道時代や、人馬の驛遞時代やランプの時代に想到するまでの必要もないことであらう。今日大都市民が坐ながらにして日々多數の人々と複雑なる社會上經濟上文化上の交通をなしうるは電話の力であり、又都市が日々數萬數十萬人といふ頼しき交通量を消化してゐるのは、その全部に非るにせよ、尚多くを市街電車・郊外電車・地下電車の力に負ふのである。又都市をして夜に至らば不夜城の如くならしめ

獨り治安上の不安を免かれしむるのみならず、晝と同様な經濟的・社會的活動をなさしむるのも主として電燈の賜である。今日の大都市から電話、電燈、電車を奪ふことは即ち都市生活の終熄を意味するものである。

(註九)電燈の發明は遠く百數十年前でありその發明者と稱するものも亦數十人の多きに上るが一八四四年米人 Samuel Morse がワシントンとバルチモア間に通信を開始したるを實用に用ひし濫觴とする。電話の發明は一八六一人獨人 Philipp Reis に端を發し一八七六年米人 Graham Bell によりて成效す。電燈は一八〇一年英國大化學者ハンフレット・デービー卿の實驗に始まり米人エヂソン英人スワン維因のユストヤハナマン米人ウイリアム・ケーリツヂ・ランゲミューア等の努力をへて今日の進歩に達した。<sup>15)</sup>

次にコンクリートに就て述べんに、コンクリートは一八二四年英人アスピディンがポートランド・セメントを發明して以來急に用途が擴大したるものなるが、一八五〇年佛人ラボーに次いで一八六七年モニエ(Joseph Monier)が鐵筋コンクリートを考案して以來この新しい建築材料は忽ち普及して近代建築物、例之大小の店舗學校・官廳・百貨店等のビルディングはいふに及ばず橋梁・水道・街路・堤防・廣場等にコンクリートの使用をみざるはなく、正しく近代大都市の骨格がコンクリートで固められてゐるの觀がある。人若しこれ等のビルディング・水道・街路・橋梁が近代大都市の經營に如何に重要な關係を有するかを省みると、コンクリートの大都市建設に及ぼしてゐる力の大きなることを認めざるをえぬであらう。(B)微生物學上の發見 微生物學上の發見の中、近代大都市の生活と最も密接なる關係を有するものは傳染病の病原菌の發見である。<sup>(註十)</sup> 傳染病が人類にとりて如何に大なる生命の脅威であるかは茲に縷説を要せざるも、試みに人は一三四六年から五三年にかけて流行したるペストのために歐洲に於て實に二千六百萬の人口が世界から奪はれたといふ記録を<sup>17)</sup>みても戰慄を感ずるであらう。これ程大規模に

15) 社會問題辭典、大百科事典に據る。  
 16) 工業大辭書、大百科事典に據る。  
 17) 暉峽義等著、社會衛生學 一五三頁。

非るも、傳染病が多くの都市人口を奪つた例に至りては枚擧に遑がない。然るに近世に至りて細菌學(Bacteriology)が發達して、それらの病氣に對する防衛や治療方法が考へ出さるゝに至り都市衛生の上に一大革新を齎らすに至つた。勿論今日社會衛生學は未だ進歩の道程にあり、都市の社會衛生的施備に至りて不完全なる點尠からざれども、將來この方面に於て更に多くの進歩改善を期待しうることは都市殊に大都市生活にとりては大なる歡びとなければならぬ。吾人が今日の大都市の存立原因として細菌學上の貢獻を數へんとすることも蓋し異論のない所であらう。

(註十)コレラ(Cholera)の病原は一八八三年にコッホ及びガフキー等によりてベスト(Besst)の病菌は明治廿七年(一八九四年)香港に流行の際我國政府から派遣された北里博士及び佛醫エールサンによりて發見された、痘瘡(Vaccinia)の病原として一八九二年に發見された Guarnieri 小體であらうと推定されてゐる。結核菌(Tuberculosis)は一八六五年ヴイレミンが結核の感染することを實證して、一八八二年コッホが病原菌を發見した。麻疹は一八六年ナイセルにより軟性下疳菌は一八八九年ヅクレーにより、梅毒病原體は一九〇五年シャウデン及びホフマンによりて、又赤痢菌は今から三十數年前に志賀潔氏によりて、癩菌は一八七一年ハンゼンによりて各々發見され、チブス(Typhus)の豫防注射は一八九六年ファイファー及びコツレによりて試みらる。<sup>10)</sup>

(丁)その他 以上の外近代大都市の成立を可能ならしめたるものとして、産業革命以後比較的平和の時代が持續したことを數へねばならぬ。戦争の破壊的なることは三十年戦争の後の歐洲の荒廢をみても知らるゝ所なるがかくの如き戦争は世界戦争までは歐大陸には起らず、世界戦争と雖も都市を破壊したことは大したものではない。戦争の多くは田園山野で行はれた。この點に於て米國の大都市は最も大きい惠みをうけ、我國の都市も日清日露の兩戦争が大陸で行はれたために、破壊から免れた。右の外、都市が郊外へとのびて常にその都市的領

域を擴張し遂に大都市的廣袤をもつに至るに就ては、住宅問題も重大なる原因であるが同時に都市的文化的煩瑣から解放されて自然に接しやうとする近代人の文化的・心理的要求に基いてゐることを忘れてはならぬ。

### 三、結 言

以上述べたる如く今日は大都市時代である。地球上に實に五百數十の大都市を數へる。しかもこれらの大都市は現代文化の創造者支配者として、中小都市及び農村に對して王座の地位を占めてゐる。而して吾人の考察したる所によりて知らるゝ如く、大都市時代の出現を可能ならしめたる理由は決して簡單なるものではない。今本小論を終るに臨みて之を要括せんに、先づ經濟的立場からは、現代大都市を建設したる根本的の力は資本である。併しこの資本を働かしめたるものとしては機械による分業の發達と都市と農村との國內的及び國際的連絡をあげねばならぬ。これらの經濟現象が企業によりて行はれたることに就ては言ふまでもない。即ち現代大都市は資本の都市であり分業の都市であり國內的國際的農村の都市であり企業の都市である。社會的にいへば現代大都市を建設したるものは主として現代産業組織の下に發生したる頼しき農村の過剩人口、即ち農村無産階級である。即ち現代大都市は無産者の都市であり労働者の都市である。法律的にいへば現代大都市を建設したるものは居住・職業・信仰・契約の自由原則である。自由の原則は資本の存する所、企業の行はれる所に人々を吸収してゆく。即ち現代大都市は自由民の都市であり、自由競争の都市である。科學上からいへば現代大都市の出現を可能ならしめたるものは細菌學の發達による傳染病からの防衛、さては電氣をはじめ諸多の理化學・土木學の賜である。現

代大都市は即ち科學の都市であり技術の都市である。最後に政治的にいへば現代國家が所謂個人主義・自由主義の社會秩序に對する保護の爲に或はその發達の爲に、國家自らが或は又自治體として都市自體に合理的な政治機構を與へその運用を助けたるによる。現代都市殊に大都市は國家の重要な政治領域として常に國家の統制をうけたることを、自治體としての都市自體の政治能力の進歩發展と共に忘れてはならぬ。即ち現代大都市は國家の都市であり自治體の都市である。さて上にあげた現代大都市の出現の可能原因の中、政治・社會・經濟的・諸原因はもとより無關係なる事項の羅列ではない。個人主義自由主義の下に活動した資本主義經濟社會に必然的な內在的連繫を以てあらはれたる事象に外ならぬのである。又科學上・技術上の諸發見や諸發明は資本主義の發展そのものとは無關係の如くみゆるが、しかも大都市的集團生活から生ずる疾病からの脅威や、生活の不便・不經濟がその發見や發明を促進せしめ且つその利用を擴めたることは否むことが出来ぬ。之を要するに近代大都市は近代社會に於ける社會上・經濟上・法律上・政治上・科學上の諸種の力の綜合的表徴である。さればこれらの諸種の力が變化するにつれて近代大都市の機能や外形も亦或は徐々に或は急激に自ら變化してゆくべく、この意味に於てかゝる大都市現象も亦一つの歴史的現象とみななければならぬ。

(一一・一一・三〇)